T2Kビーム測定と 振動解析への応用

特定領域「フレーバー物理の新展開」研究会 2012.07.07 @ 奈良県吉野山 京都大学D2 鈴木研人

Contents:

1. T2K実験

2. Muon monitorを用いたビーム測定

3. 振動解析への応用





- 大強度ニュートリノビームを用いた長基線ニュートリノ振動実験
 - 電子ニュートリノ出現モード探索によるθ13測定
 - ミューオンニュートリノ消失モードによるΔm²23、θ23の精密測定



Muon monitor を用いた ビーム測定

T2K Run Time



Proton on Target ⁵

(*)



- 地震後、Run 3のデータ取得前に、Commissioning Runを実施
 - 電磁ホーンは電源故障のため稼動せず
 - 地震前の再現性の確認

Delivered # of protons

• Target / Baffle (コリメータ)の地震後の状況

Muon Monitor



これらの情報から、Target / Baffleのalignment情報を引き出せないか?

Target/Baffle Alignment Check



Baffle Alignment -Result-

- Baffle (Φ=30 mm) とTarget (Φ=26 mm) には2 mmの隙 間がある
 - この隙間を陽子ビームが突き抜けると、2次粒子があまり生成されず、µビームのプロファイル幅が小さくなる、と考えられる
 - 極小値をFit(2次関数)によって求め、隙間の位置を 算出
 - Baffle-Target間のAlignmentが正しいかを確認できる

X方向でBaffle alignmentのずれている可能性がある事が分かった



9



Target Alignment -Result-

- Muon monitorで測定したµビーム 強度を陽子数で規格化し、この値 と各陽子ビームのTargetの位置と の関係を調べた
- X方向に関して、X=0に対して分布 が非対称
- ビーム軸に対して、Targetの位置が X方向で1mm程ずれている可能性 がある事が分かった





地震前の状況との比較

- 地震前のデータはそもそも限りがある。

 <u>陽子ビームをY方向にScanした</u>
 データのみで比較。
- Target Alignment
 - μ収量の陽子ビーム位置依存性に大 きな違いは見られない。
- Baffle Alignment
 - 地震前と後で、μビームプロファイ ル幅の陽子ビーム位置依存性に<u>違</u> いが見られる。
 - +Y方向で、Baffle-Target間の隙 間に違いが見られる。
 - -Y方向で、地震前のデータ点がも う少し欲しいところ。
 - いずれにせよ、Baffle alignmentが
 ずれてきている可能性は大きい。



Summary so far

- T2K Commissioning runにおけるMuon monitorを用いた測定。
 - 地震前の再現性の確認。
 - X方向でBaffle及びTargetのAlignmentがずれている可能性がある事が分かった。
 - 地震によるものなのかは不明。
 - <u>物理ランにおいては、陽子ビームはTarget中心に合わせてい</u> る。従って、現状ではデータ取得において問題は無い。
 - しかしながら、ビームを用いたAlignmentの定期的なチェック は重要である。

振動解析への応用

振動解析の戦略 - 全体の流れ-



振動解析の戦略 -v Flux-



v Flux Prediction



Flux Uncertainty

- ハドロン生成の不定性
 - 外部データの測定誤差等
- 陽子ビームモニターの測定誤差
 - 陽子ビーム幅、角度、中心位 置
- Target/電磁ホーン設置精度
- 電磁ホーン電流
 - ホーン電流モニターの長時間
 安定性、絶対精度等
- 電磁ホーン磁場
 - 磁場の非軸対称性
- vビーム方向 (Off-axis角)
 - INGRID の測定精度





17

振動解析の戦略 -Fit for ND280 data-





Covariance Matrix, Vbの計算

- Covariance Matrix, Vbは<u>エネルギー、v flavor、Detector</u> (ND280, SK)間の相関を考慮して計算される。 各エラー ソースに起因するCovariance Matrixを計算し、最終的に 足し上げる。
- Vbの各成分(i,j):Fluxの不定性の原因となる各エラー ソースのパラメータが、

 $\& Z(\Phi^+ - \Phi(n+\delta n)) \Phi^- - \Phi(n-\delta n))$

- 1変数のみ (ホーン電流、Off-axis角など)
 - パラメータを±1oだけ動かしたときのFluxを見積

$$V_{ij} = \frac{(\phi_i^+ - \phi_i)(\phi_j^+ - \phi_j) + (\phi_i^- - \phi_i)(\phi_j^- - \phi_j)}{2\phi_i\phi_j}$$

- 多変数(陽子ビームのパラメータなど)
 - ・ 変数間の相関を考慮し、各エラーパラメータを
 p→p+𝔑(0, δp)に従い変化させ(𝔑 : 正規分布)、









20

realized Hithor MD280 data systematic Employed to the states



Summary

- v flux prediction:
 - T2Kでは外部データも用いて、より精密な予測を行っている。
 - 考えられる全ての不定性の原因を考察し、最終的にCovariance Matrix (V_b)を構築し、ND280データのFitに用いる。
- 振動解析へのInput:
 - ND280のデータを用いてFitを行い、v flux, v cross sectionの不 定性に対してあらかじめ抑制をかけている。
 - 新しく求めた各Parameterを用い、Likelihoodに導入して振動
 解析を行っている。



μ Profile Center Measured by Muon Monitor



μ Yields Measured by Muon Monitor



Baffle Alignment Check by the other monitor



Fit Result (mm)

Baffle Alignment check



OTRTESHE						
X Scan		Y Scan				
- direction	+ direction	- direction	+ direction			
-15.99	+13.51	-14.78	15.06			

Muon monitor result

OTR result

Fit result (mm)	-15.0 ± 0.04	13.7 ± 0.04	-14.1 ± 0.03	4.9 ± 0.

Hadron Production Tuning

- What are we tuning ?
 - Production x-sec (Al) : $\sigma_{\text{prod}} = \sigma_{\text{inel.}} \sigma_{\text{qe}}$
 - σ_{inel} : inelastic interaction x-sec
 - σ_{qe} : quasi-elastic interaction x-sec
 - Multiplicity : $d^2n/dpd\theta = 1/\sigma_{prod} \cdot d^2\sigma/dpd\theta$
 - Pion production
 - Kaon production
 - These multiplicities are tuned by using experimental data
 - ✓ NA61, etc..

CERN NA61



p-θ distribution of parent particles whose daughters go to Super-K





p (GeV/c)

Available p- θ coverage of data for Kaon tuning



Particles K^{\pm}

 K^{\pm}

 K^+

θ (rad)

25

Kaon tuning result



Kaon tuning uncertainty



32

Total tuning result







Tuned v Flux at Super-K



(a) ν_{μ} flux



(b) $\bar{\nu}_{\mu}$ flux





(c) ν_e flux

v Flux uncertainties







Correlation matrix after ND280 fitting

